

第3回 掛川考古展

弥生時代



市内出土の弥生土器

とき 平成19年11月3日土～11日日

ところ 掛川市立大東図書館1階生涯学習ホール

掛川市教育委員会

開発予定地内に遺跡はありませんか？
工事の計画前に確認して下さい。

掛川市内には現在694遺跡が確認されていて、県内でいちばん遺跡が多い市だといわれています。遺跡（埋蔵文化財）は、私たちの“心のふるさと”であり、後世の人たちに伝えていく大切なものです。

そのため、「文化財保護法」により、遺跡がある場所で、土木工事や建築工事、茶園の改植などを行う場合には、事前に文化庁へ届け出をすることが義務づけられています。

届け出をしないで工事を始めたところ、遺跡が見つかったため調査をすることになり完成が遅れてしまった……ということがないように、工事を計画する場合には、早めに教育委員会にご相談ください。

なお、教育委員会、図書館には、市内にある遺跡の位置を記した「遺跡地図」があります。静岡県教育委員会のホームページでも「遺跡地図」は公開されています。工事を計画する前には必ず確認してください。

掛川市教育委員会 生涯教育課 文化財係

電話 (0537) 21-1158



文化財愛護シンボルマーク

文化財愛護シンボルマークは、文化財愛護運動を全国に推し進めるための旗じるしとして、昭和41年（1966）5月に定められたものです。

このシンボルマークは、ひろげた両手の手のひらのパターンによって、日本建築の重要な要素である斗拱（とうこう=組みものの）のイメージを表し、これを三つ重ねることにより、文化財という民族の遺産を過去、現在、未来にわたり永遠に伝承してゆくという愛護精神を象徴したものです。

やよい めい しゅう 弥生という名称

1884年（明治17）、東京市本郷向ヶ丘跡（現在の東京都文京区弥生）の貝塚から土器が発見されました。この土器は、すでに知られていた「縄文式土器」とは違った特徴を持っていたことから、発見場所の地名をとて「弥生式土器」と名付けられました。この「弥生式土器」が使われた時代が、「弥生式時代」と呼ばれましたが、後に「式」を省略することが一般的となり、「弥生土器」・「弥生時代」と呼ばれるようになりました。

弥生時代

かつては、約2,400年前から2,300年前（紀元前400年ころから300年ころ）に弥生時代が始まり、約1,700年前（300年ころ）に終わったというのが通説でした。その後、弥生時代の始まりは約2,500年前から2,400年前とされ、最近の研究ではさらに始まりがさかのぼって、約2,950年前の紀元前10世紀後半という説が出されています。

弥生時代は、朝鮮半島から九州北部に稲作が伝わり、日本で米作りが始まった時代です。米作りには、水田に水を引くための施設を整備したり、水田の水廻りを良くするために地形を平らにする作業などが伴うので、大勢の人々の協力を必要としました。そこで、人々は、狩猟・採集に適した山から、水田に水を引きやすい平原とか水田に近い台地上にムラを作つて定住するようになりました。

弥生時代は、稲作とともに大陸から伝えられた道具と技術によって、人々の生活が豊かになり、社会が発展した時代といえます。



高田遺跡（吉岡）から発見された米（約1,700年前）

掛川の弥生時代の始まり

弥生時代の始まりは、最近では九州北部で紀元前10世紀後半から、近畿南部で紀元前7世紀と考えられています。今のところ掛川の弥生時代の始まりは、そこまではさかのぼら

す、今から約2,200年前の紀元前2世紀ごろと推定される原川遺跡（原川）からと考えられています。原川遺跡は集落の跡で、建物と墓の跡が発見されています。これ以降の集落や墓の跡などが市内から多数発見されていますが、米を作った水田の跡はまだ発見されていません。

市内の遺跡から数多く発見されている建物、土器などの道具、墓について少し見てみましょう。

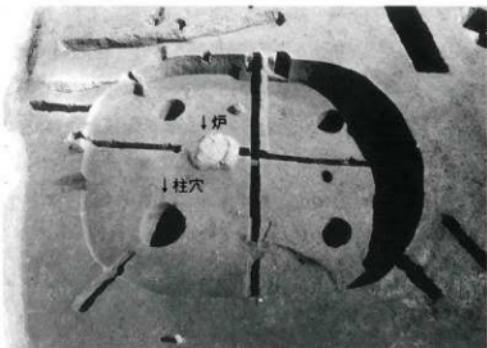
建 物

建物の跡は、竪穴住居、掘立柱建物の2種類に分ることができます。

竪穴住居跡は、地面を掘り下げて床を作り、まわりに掘り上げた土を積み、屋根を架けた家です。床の中央付近には火を焚くための炉があります。炉は、食べ物の煮炊き、照明、寒い季節には暖房の役割を果たしました。床は、固く締まっていて、家の中の湿気を防ぎ快適に生活できるようになっていました。住居の中には柱が4本立てられ、屋根を支えていました。

市内の弥生時代後期（約2,000年前から約1,700年前）の遺跡からは、竪穴住居が火事にあって焼け落ちたために、屋根材が炭になつて残っていた例が発見されています。

東ノ谷遺跡（長谷）から発見された屋根材は、クスギとクリでした。周辺に生えていた木を使用して住居を建てたと考えられることから、東ノ谷遺跡周辺には、落葉広葉樹であるクス



竪穴住居跡（東ノ谷遺跡）



火事で焼け落ちた竪穴住居跡（東ノ谷遺跡）

ギ・クリが生えていたと考えられます。

六ノ坪Ⅳ遺跡（秋葉路）から発見された屋根材は、落葉広葉樹であるコナラ・エゴノキ、常緑広葉樹であるサカキでした。

堂山遺跡（原里）では、落葉広葉樹のコナラ・モクレン、常緑広葉樹のシノキ・針葉樹のモミが使用されていました。現在の植生から、台地上にシノキ・コナラ、谷沿いにモクレン、山地の斜面などにモミが生えていて、これらの木の材質を考慮して用材を選択した可能性が推定されます。

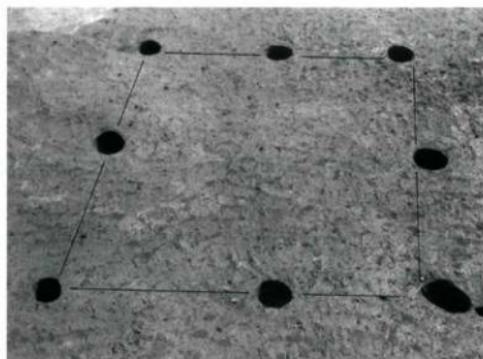
東ノ谷遺跡・女高Ⅰ遺跡（高田）の火事で焼け落ちた住居跡からは、炭になった萱が発見されていて、屋根が萱で葺かれていたことがわかります。萱の上から火事で焼けた土が発見されていることから、萱の上に土がかぶせられていたことがわかります。

住居の中から、当時の生活をしのばせる物も発見されることがあります。

東ノ谷遺跡・高田遺跡（吉岡）からは米が発見され、六ノ坪Ⅳ遺跡（秋葉路）からはアサの種子が発見されています。アサは、繊維として、種・実は食用・薬用として利用されてきた植物で、六ノ坪Ⅳ遺跡でも繊維や食用、薬用などに利用されていたと推定されます。東ノ谷遺跡から木製の玉が、吉岡原遺跡（吉岡）からは、ガラス製の玉が発見されています。

掘立柱建物跡は、地面に柱穴が長方形とか、田の字にならんだ状態で発見されます。掘立柱建物跡は、住居跡と考えられるものもありますが、主に倉庫として使われた建物と考えられます。

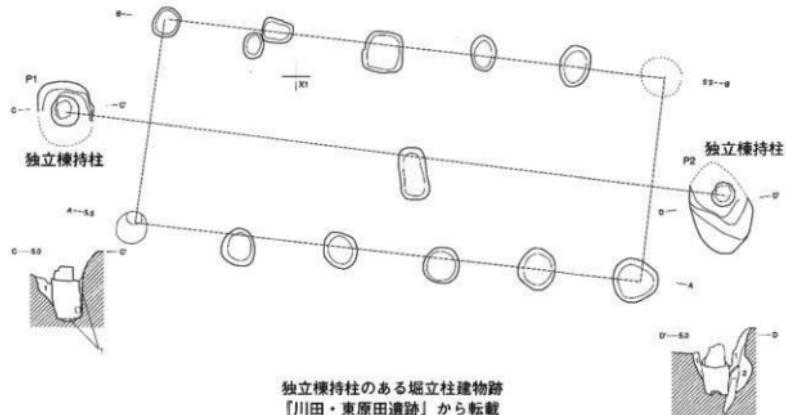
倉庫は、貯蔵する米を湿気から守るために高床式になっていて、柱には「ネズミ返し」と呼ばれる板がはめこまれ、登ってくるネズミの侵入を防いでいたと考えられます。東ノ谷遺跡では、掘立柱建物を取り巻くように縦穴住居が配置されていました。倉庫を共同で管理していたのではないかでしょうか。



掘立柱建物跡（溝ノ口遺跡）

菊川市の川田・東原田遺跡（下平川）から独立棟持柱と呼ばれる、突出した棟木を直接支えるための柱がある掘立柱建物跡が発見されています。このような柱がある建物跡は、市内の集落からはまだ発見されたことはありません。特殊な構造であることから、宗教的

な性格の建物であったと推定されています。



道具

弥生時代の人々が使っていた道具は、材質の違いから、石器、土器、木器、青銅器、鐵器に分けられます。

石器は、縄文時代同様、打製と磨製がありました。

打製石器は、自然石を打ち欠いて作られたもので、鋭い刃が特徴です。東ノ谷遺跡（長谷）からは、石鎌（やじり）が発見されています。主食は米でしたが、弓矢で動物を捕獲して食料としていたことがわかります。また、大六山遺跡（満水）からは、武器である石槍が発見されています。

磨製石器は、稲作の技術と一緒に大陸から伝わってきた石斧が代表例としてあげられます。第一小学校のプール建設に伴う発掘調査で、この大陸伝来の石斧がまとまって発見されました。大六山遺跡からは、武器である石剣が発見されています。この大六山遺跡の石剣は、先ほど述べた石槍と重なった状態で発見されました。弥生時代は、水田の拡大や水の利用などをめぐって争いが起きたとされていますが、この石剣と石槍が実際に戦いで使用されたかどうかはわかりません。

市内から発見されている弥生時代中期（約2,200年前から約2,000年前）の土器は、煮炊きに使う甕と貯蔵用の壺があります。縄文土器の煮炊き用の深鉢、盛り付けるための浅鉢と比較しても、器の種類にあまり変化はありません。

後期（約2,000年前から約1,700年前）になると、甕と壺のほかに、食べ物を盛るための器

である高坏が加わります。天竜川から大井川の間の遺跡から発見される後期の土器の形・デザインがたいへんよく似ていて、菊川流域を中心に分布するとして「菊川式」土器と呼ばれています。この地域に住んでいた人々は、土器作りに関して強い結び付きがあったことがわかります。

木器は、食器・農耕具とし

て使用されと考えられますが、この時代のものは、まだ市内から発見されていません。第一小学校のプール建設に伴う発掘調査で発見されたさまざまな形の石斧を見ていると、これらの石斧で加工された木器が必ず存在すると確信されます。

青銅器は、大陸から九州北部に伝えられ、西日本に広まりました。九州北部を中心とする地域では銅劍や銅矛、銅戈などの武器が、畿内を中心とする地域では銅鐸が多く発見されています。銅鐸は、朝鮮半島に起源を持つとされ、稻作に関わる祭りで使用されたと考えられています。掛川市内からも銅鐸がひとつ、江戸時代に長谷地内から見つかっています。

残念ながら現物は行方不明になってしまい、スケッチした絵だけが伝えられています。掛川市の遺跡から、ほかに青銅器は発見されていませんが、袋井市の愛野向山遺跡（愛野）からは小銅鏡と銅鑓（やじり）、掛之上遺跡（高尾）からは銅鐸の破片、森町の文殊堂遺跡（円田）からは銅鏡（腕輪）と銅鑓、磐田市の梵天I遺跡（勾坂中）からは銅鏡と銅鑓が発見されるなど、掛川市周辺の後期の遺跡から最近青銅製品の発見が相次いでいます。これらの遺跡から発見された青銅製品のほとんどは、墓跡から発見された死者への供え物です。今後、青銅製品が市内から発見される期待は十分にあります。

鉄も青銅器とともに、大陸から九州北部に伝えられました。鉄は、当初農耕具の加工用に利用されました。鉄製の刃物の出現は、木の加工技術をおおいに進歩させました。



大六山遺跡の石槍（左）と石剣



「菊川式」土器 壺（左）・壺（中央）・高杯

市内の弥生時代中期の遺跡からは、木の加工用と考えられる石斧がいくつか発見されています。後期の遺跡から石斧の発見がないことから、この時期になると鉄の利用が広まって、石斧が姿を消したと考えられます。

後期の墓から、死者への供え物として発見される鉄製品があります。原新田遺跡（下西郷）からは剣、森町の文殊堂遺跡（円田）からも剣、磐田市の梵天I遺跡（勾坂中）からは剣と鎌が発見されるなど、青銅製品同様、最近周辺での発見例が増えています。これらは、死者への供え物であることから、富裕を誇示する物とも考えられ、実用であったかどうかはわかりません。

墓

墓の種類は、地面に穴を掘り死者をおさめた土壙墓、木製の箱（現代の棺桶のような形）に死者をおさめ埋葬した木棺墓、壺・甕を棺とした土器棺墓があります。木棺墓は、縄文時代には見られないで、朝鮮半島から伝わってきた埋葬方法だと考えられます。死者を埋葬した墓穴の回りを取り囲むように四角に溝を巡らし、掘った土で内側に盛り土をしたもののが方形周溝墓です。方形周溝墓は、弥生時代に入って畿内で作り始められた墓です。方形周溝墓は、ふつう群を形成して作られています。この群は、溝をいくつもの墓で共有したり、同じ方向を向いたりするなど、強い結び付きがあったことがうかがえます。

墓の跡は、原川遺跡（原川）から約2,200年前（紀元前2世紀）の土器棺墓が発見され、山下遺跡（各和）で約2,100年前の方形周溝墓が確認されています。この時期に、掛川に方形周溝墓が伝わってきたと考えることができます。方形周溝墓の伝播以降は、土壙墓・土器棺墓・方形周溝墓が集まって墓地を形成する傾向にあります。山下遺跡の場合、土器棺墓は発見されていませんが、土壙墓と方形周溝墓が見つかっています。土壙墓は、方形周溝墓が途切れる部分から並んで発見されました。原遺跡（上西郷）からは



方形周溝墓群（山下遺跡）

方形周溝墓と土器棺墓が発見されていて、土器棺墓は方形周溝墓の外側から発見されています。これらから、方形周溝墓が墓地の中心を占め、周辺に土壙墓・土器棺が配置されていることがわかります。



土壙墓群（山下遺跡）



土器棺墓（山下遺跡）

不動ヶ谷遺跡（上屋敷）は、狭い尾根上に作られた方形周溝墓群で、同じ尾根の上にムラはありませんでした。このように、墓地はムラとは別の場所に作られました。死者を恐れてのことでしょうか。

これらの墓跡からは、死者に供えられた物として、土器のほかに、中期では石斧、石製の玉、後期になると青銅製品、鉄製品、石製・ガラス製の玉が発見されることがあります。

約1,700年前の後期も終わりころになると、大きな方形周溝墓がひとつくりで作られることがあり、溝ノ口遺跡（高田）・原遺跡（上西郷）などから発見されています。

とびぬけて大きく、他の方形周溝墓群とは離れた場所に存在することは、次の時代の古墳に埋葬された豪族のような権力者が誕生しつつあったことを物語っているのかもしれません。

- 参考図書 『掛川市史上巻』掛川市 1997
『日本の歴史』朝日新聞社 1989
『日本歴史館』小学館 1993
『弥生時代はどう変わるか』学生社 2007
『米つくりと日本人』毎日新聞社 1990

年 表

時代	年代	全国のできごと	中国
時代文 紀元前			周
早期 900	朝鮮半島から北部九州に稻作が伝わる。		春秋時代
前期 700			戦国時代
400	鉄器、青銅器が伝わる。		秦
中期 100	稻作が静岡地方に伝わる。 古代中国は日本を「倭」と呼んでいた。「倭」は百余国に分かれていた。(『漢書地理志』)		前漢
西暦1 57			新
弥生時代 後期	57 107 170～180 200 239 248	倭の「奴国王」が後漢の光武帝に朝貢して「漢倭奴国王」金印を授かる。(『後漢書東夷伝』) 瀬戸内海、大阪湾岸で丘上のムラが出現する。 (高地性集落) 倭の「国王師升」が安帝に朝貢した。(『後漢書東夷伝』) 大阪湾岸で高地性集落が再び出現する。 「倭國乱る」(『魏志倭人伝』)、「倭國大いに乱る」(『後漢書東夷伝』) 邪馬台国で卑弥呼女王となり、大乱を治める。(『魏志倭人伝』) 卑弥呼が魏に朝貢し「親魏倭王」の号を受ける。(『魏志倭人伝』) 卑弥呼死す。倭國は乱れ壹与女王となり國を治める。 (『魏志倭人伝』)	後漢 後漢 三国時代 西晋

年代額は『弥生時代はどう変わるか』(学生社刊)によった